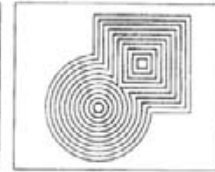


モノグラフ・高校生'95

vol. 45 定時制高校生の生活と意識



監修・静岡大学教授 深谷 昌志

東京都立上野高校教諭 蒲生真紗雄
東京都立上野高校教諭 木下 勉
神奈川県立湘南高校教諭 穂坂明德

●目次

要約	2
第1章 調査の意図と調査対象の特性	6
1. 調査の意図	6
2. 調査の方法	7
3. 調査対象の特性	8
第2章 定時制高校生の日常生活	10
1. 定時制高校生と家庭環境	10
2. 登校までにしていること	14
3. 通学のようにす	16
4. 仕事の実態と意識	18
第3章 定時制高校生の高校選択の要因と学校の現状評価	29
1. 定時制高校に至るまでのキャリア	29
2. 定時制高校選択の要因	32
3. 学校の現状評価	38
第4章 学校生活と自己像・将来像	50
1. 学校生活の中の楽しみ	50
2. 自己像と現在の生きがい	56
3. 将来像の見通し	61
おわりに	66
資料1 調査票見本	69
資料2 学年・性別集計表	82



定時制高校生の生活と意識

要 約

第1章 調査の意図と調査対象の特性

① 調査の意図

かつての働きながら学ぶ勤労青少年の教育の場という定時制のイメージと実態の差を、定時制高校生の日常生活・学校生活や自己像・将来像を調べるとともに、定時制高校に対する意識や評価から明らかにしようとした。

② 調査の方法

調査対象は、首都圏の東京都・神奈川県・埼玉県の公立定時制高校13校の生徒で、サンプル数は612名である。調査方法は、学校通

しの質問紙調査で、1995年2月～5月に実施した。

③ 調査対象の特性

調査対象者の地域別割合は、東京が60.5%、神奈川が32.0%、埼玉が7.5%である。課程別では、普通科84.3%、職業科15.7%である。性別では、男子67.2%、女子32.8%である(p.8表1-1)。年齢別では、15歳5.8%、16歳23.8%、17歳26.0%、18歳20.5%、19歳10.1%、20歳以上13.8%という割合で、成人の占める割合が結構多い(p.9表1-3)。

第2章 定時制高校生の日常生活

① 家庭環境

かつての定時制高校生のように親元を離れて一人暮らしの実態はなく、96.4%が家族と同居している（p.11 表2-1）。しかし、家族との同居では母親との同居が67.5%、父親とが57.9%と多様な家庭環境の生徒がかなりいる（p.11 表2-2）。

② 登校までにしていること

1年生は「仕事・アルバイトをしている」生徒が49.4%と約2人に1人が働いているにすぎない。かわって、「何となく過ごす」が53.7%、「テレビやマンガを見たり」が50.0%と高い比率を示す。しかし、学年進行で仕事・アルバイトをする率が高まり、外に仕事などを持つようになる（p.15 図2-4）。

③ 通学のおよび

全体の68.8%が家からの通学であり、学校まで30分未満の通学時間の生徒が62.0%。また、徒歩あるいは自転車での通学者が37.1%である（p.17 表2-6）。

④ 仕事の実態と意識

1年生では、何も仕事をしていない生徒が47.1%であるが、2年生以降では仕事・アルバイトを持つ生徒が約7割となる（p.18 図2-5）。週あたり30時間以下の勤務時間の生徒が60.4%（p.24 表2-10）と、全体に短い勤務時間である。就業形態別では就職者が「働くのが当然」89.9%、アルバイトをしている者は74.1%が「お小遣いが足りないから働く」とする（p.25 表2-12）。働いて得たお金を家に入れている者は約半数であるが、学費を自分で一部でも出している生徒は、学年進行で増加し、4年生では53.6%となる（p.28 図2-10）。ここには働きながら学ぶ姿がある。

第3章 定時制高校生の高校選択の 要因と学校の現状評価

① 定時制高校に至るまでのキャリア

中卒後すぐに進学してきた者が53.3%いる。ただし、定時制を第一志望にしていた者は23.5%にすぎない。全日制高校の中退・転学経験者は32.0%いる（全日制中退後に一度社会に出た者を除くと23.2%になる）。一度社会に出た経験者も16.4%おり、この3タイプで92.9%に達する（p.30 表3-1、p.31 表3-2）。

② 定時制高校選択の要因

定時制を選択する要因の第一は、生徒の住んでいる家から近い（44.8%）ということである（p.33 図3-1）。定時制の内容や特色などについては、属性別には重視した項目もあるが、共通する顕著な意識は特に認められなかった（p.35 図3-2）。ただし、高卒資格の必要性は77.1%の者が強く意識している（p.37 図3-3）。

③ 学校の現状評価

定時制高校のよいところは、「校則が厳しくない」（50.3%）というところであり、次いで「昼間働き、夜勉強ができる」と「一度社会に出て途中からでも入りやすい」が続く。「終業年限が4年間でゆったりしている」という定時制の特色には、あまり好感を持っていない（p.39 図3-4）。

高校での勉強が将来役に立つと思っている者は46.2%おり、役に立たないと思っている者の2.4倍も多い（p.44 図3-5）。特に1年生は強くそう思っている（p.45 表3-7）。また、現在の授業を理解できている層が27.2%いるのに対して、基礎・基本を重視した平易な授業でも理解できていない層が22.6%いる（p.46 図3-6）。

学校生活を全体的にみて、充実していると感じている層が28.2%いるのに対して、充実していないとする層は28.8%いる（p.49 図3-7）。

第4章 学校生活と自己像・将来像

① 学校生活の中の楽しみ

学校へ来るときの気分は60.5%の生徒が「楽しい」と答えている（p.51 図4-1）。ただし、「学校をさぼりたい」という気持ちも結構強い（71.6%、p.52 表4-1）。

校内では、「友だちとのおしゃべり」（62.3%）が一番楽しく、授業はあまり楽しくないと感じている。性別では、女子の方が楽しさを感じる度合いが強い（p.54 表4-3）。

授業中は「ノートをしっかりとり」（75.0%）、「先生の話を熱心に聞いている」（47.6%）と授業に同調的な自己評価をしている（p.55 表4-4）。

② 自己像と現在の生きがい

自己を「友だちづきあいがよい」（54.7%）し、「個性がはっきりしている」（53.7

%）と評価している（p.56 表4-5）。現在、一生懸命がんばっていることも「友だちづきあい」（67.2%）がトップにあげられている。「勉強」はあまり重視していない（p.57 図4-4）。彼らの生活の中で友人関係の占める割合は極めて大きい。

③ 将来像の見通し

高卒資格の獲得を契機に新しい職場を目指したり、大学・短大などの上級学校への進学を目標とする者が6割以上いる（p.62 表4-8）。しかし、将来の自分の生活予測にはかなり厳しい評価をしている（p.64 表4-10）。将来の可能性についても、「人に負けない趣味を持つ」（58.9%）以外は必ずしも高くはない。ただし、「自分の店や会社を持つ」や「お金持ちになる」には、全日制の生徒より強い意識を持っている（p.65 表4-11）。

〔調査概要〕

対象●東京都9校、神奈川県2校、埼玉県2校の公立定時制高校13校の1～4年生612名

時期●1995年2月～5月

方法●学校通しによる質問紙調査

〔執筆分担〕

蒲生眞紗雄（東京都立上野高校教諭）……第1章、第3章、おわりに

木下 勉（東京都立上野高校教諭）……第2章

穂坂 明德（神奈川県立湘南高校教諭）……第4章

第 1 章

調査の意図と調査対象の特性

1. 調査の意図

定時制高校は、戦後教育の機会均等の理念に基づき、後期中等教育を広く勤労青少年に与えることを目的として、1948年から発足したことは周知の事実である。そして、1950年代には、中学校卒業者の20%を占めるほどになっていた（1953年には22.3%に達した）。

しかし、1964年の東京オリンピック開催に象徴されるように、60年代に入って高度経済成長が豊かな社会を実現し始めると、全日制高校への進学率が急上昇し、1965年には、定時制生徒の占める比率は9.9%と、全体の1割を切った。こうした傾向はその後も加速され、1994年現在、全国の定時制高校は学校数で959校、生徒数で11万940人となっている。生徒数では、高校生全体の2.2%を占めるにすぎなくなった。

そして、これは定時制高校のピーク時の1953年と比較すると、約40年間で、学校数で69.9%減、生徒数で80.4%減となってしまったことを示している。東京都の場合でも、1993年で都内公立中学校卒業者の1.9%しか定時制高校に進学していないのである。

その結果、教育の効率化の名目のもとに、3年制や単位制の導入とともに、定時制高校の統廃合が進められているのが現状である。

では、定時制高校の役割は終わりつつあるのかというと、必ずしもそうとはいえない。たしかに働きながら学ぶ勤労青少年は、発足時から比べると減少してきているが、一方で全日制から様々な理由ではじき出されてきた者たちの受け皿的な役割や、不登校の生徒などの進学先としての役割が新たに生まれてきている。また、帰国生徒や外国籍の生徒も入学するようになっている。そして、多様な生徒が在籍する中で、きめ細かい個別指導などを通して1人も切り捨てない教育を実践しようとしている定時制高校も多く存在する。

以上のような現状の中で、今回の調査は首都圏の定時制高校に学ぶ生徒を対象に選んだ。定時制高校生の日常生活・学校生活の実態や自己像・将来像を調べるとともに、定時制高校に対する意識や評価を探った。そうした上で、定時制教育の今日的意義や役割などを明らかにしようと考えた。

なお、今回の調査で首都圏の定時制高校生に限定した理由は、多様な生徒が存在してお

り、現在の定時制高校のかかえる諸問題を調査するのに一番適当と考えたからである。

2. 調査の方法

調査対象は、首都圏の東京・神奈川・埼玉の公立定時制高校13校の生徒で、サンプル数は、612名である。調査対象校は、研究会同人のつてを利用して調査内容、目的などを事前に伝えて了解を得て協力をいただいた学校に限られた。したがって、生徒の大多数が調査に応じてくれた学校もあったが、1、2クラスだけの学校もあった。学校別のサンプル数には、かなりのバラつきがあったので、学校別の分析は今回は行わなかった。

調査の方法は、学校通しの質問紙調査とし、学校毎に回収した。調査の実施時期は、1995年の2月～3月を目途にしていたが、実際には、年度末で生徒が把握できないなどの事情もあり、最後の学校の回収は5月までずれ込んだ。

調査項目は、生徒の属性項目、日常生活や授業などの学校生活に関する項目、定時制高校を選んだ理由や学校の現状評価、進路や将来像、自己像などである。

3. 調査対象の特性

調査対象校13校の概要は、表1-1に示してある。地域別では、東京都が9校と一番多く、神奈川県と埼玉県が各2校を占めている。サンプル数の割合でみると、東京都が60.5%、神奈川県が32.0%、埼玉県が7.5%となっている。課程別では、普通科が84.3%に対して職業科が15.7%である。東京都の場合、普通科が72.6%、職業科が27.4%となっている

(1994年9月の東京都高等学校教職員組合定時制部の調査)ので、今回の調査では、やや普通科の生徒の意見が多く反映しているともいえよう。性別では、男子が67.2%、女子が32.8%である。性別については、先の都高教の調査とも大差がないので、この数値は首都圏の定時制高校の平均値と考えても大過あるまい。

表1-1 調査対象校の概要

学校	地 域	課 程	サンプル数	性 別		割 合 (%)
				男 子	女 子	
A	東 京	普通科	20	8	12	3.3
B	神奈川	普通科	31	23	8	5.1
C	東 京	工業科	20	18	2	3.3
D	東 京	農業科	38	26	12	6.2
E	東 京	普通科	68	49	19	11.1
F	神奈川	普通科	165	110	55	26.9
G	東 京	普通科	40	31	9	6.5
H	東 京	普通科	56	33	23	9.2
I	東 京	商業科	38	16	22	6.2
J	東 京	普通科	43	30	13	7.0
K	埼 玉	普通科	41	31	10	6.7
L	埼 玉	普通科	5	3	2	0.8
M	東 京	普通科	47	33	14	7.7
合 計			612	411 (67.2%)	201 (32.8%)	100%

次に調査対象者についてまとめておこう。
 表1-2は、生徒の学年別の割合を示したものである。定時制高校では、学年別の割合は1年生が一番多いのが通例であるのに、この数値は1年生が極端に低くなっている。この背景としては、本調査を4月に実施した学校がかなりあり、それらの中では、調査内容から入学早々では調査の目的が達せられないと判断して、1年生への調査をさけたためではないかと推定できる。また、3月に実施したところでは、4年生がすでに卒業していたところもあったようで、4年生の数値が若干少

ないと思われる。

表1-3は、生徒の年齢別の割合である。中学卒業後すぐに進学した者に相当する15歳が5.8%と大変少ないのは、先にも説明したように、4月に調査した学校で新入生を除外したためであると推定できる。また、20歳以上の成人の割合が13.8%と1割強を占めていることから、定時制高校には、中学卒業後すぐに入学したのではなく、いろいろな道歩んできた生徒がかなりいることが理解できよう。

表1-2 生徒の学年

(%)

1年生	2年生	3年生	4年生
14.7	36.1	26.3	22.9

表1-3 生徒の年齢

(%)

15歳	16歳	17歳	18歳	19歳	20歳以上
5.8	23.8	26.0	20.5	10.1	13.8

第 2 章

定時制高校生の日常生活

定時制高校に通う生徒といえば、「働きながら学ぶ」というイメージがある。しかし、20年ほど前から定時制に通う生徒の中に地方出身者は激減し、かわって地元出身者がその大多数を占めるようになると、「働きながら学ぶ」という勤労学生のイメージは大きく変

質してきた。

この章では、現在、定時制高校に通う生徒が、学校外の生活において、どのような日常生活を送っているかを家庭環境、登校までにしていること、登校のようす、仕事の実態と意識の4項目から探ってみることにした。

1. 定時制高校生と家庭環境

かつての定時制高校生には、会社の寮なりアパートなりで1人で生活している人が数多くいた。高度経済成長によって、都市部では全日制高校への進学率が上昇した。一方、企業は大量の若年労働者を必要としたから、都市部の定時制高校には、集団就職などによって親元を離れ、1人都会で暮らしながら昼間働き、夜学に通う地方出身者が多くを占めていた。やがて、春先の風物詩の1つであった集団就職列車が運行されなくなり、定時制高校に占める地方出身者の数も激減し、かわって地元の中学出身者が多くを占めるようになったといわれている。それでは、現在の定時制高校生はどのような日常生活を送っているか、まず家庭環境から検討してみる。

表2-1・2・3・4は、現在、同居して

いる人数とその内訳を「結婚していない」層と「結婚している」層とに分けてまとめたものである。今回の調査対象の612名中、「結婚している」と答えている生徒は28名で全体の4.6%にすぎない。大多数を占める「結婚していない」生徒の自分を含めた同居人数を表にまとめたものが表2-1である。明確に、「1人で暮らしている」と答えている者は3.6%にすぎず、何らかの形で家族と同居している生徒が96.4%いる。また、表2-2で「誰と同居しているか」をみると、一番高い比率が母親で67.5%、次いで父親の57.9%である。すなわち、現在の定時制高校生は大多数が家族と同居していること、同居している家族構成は多様で、いわゆる欠損家庭の生徒もかなり多くいることがわかる。

表2-3・4は「結婚している」生徒の同居人数、同居の家族構成をまとめたものである。

る。ここでも配偶者との同居率が50%以下を示し、多様な状況にあると推測できる。

表2-1 自分を含めた同居家族数
(結婚していない場合)

		(%)
1人	3.6	} 96.4
2人	8.3	
3人	20.4	
4人	34.8	
5人	21.7	
6人	7.5	
7人以上	3.7	

表2-2 家族の誰と同居しているか
(結婚していない場合)

		(%)
父親	57.9	
母親	67.5	
兄	21.1	
姉	19.7	
弟	19.5	
妹	17.8	
祖母	8.2	
祖父	2.9	
その他	7.0	

表2-3 自分を含めた同居家族数
(結婚している場合)

		(%)
1人	7.1	
2人	17.9	
3人	10.7	
4人	14.3	
5人	28.6	
6人	10.7	
7人以上	10.7	

表2-4 家族の誰と同居しているか
(結婚している場合)

		(%)
父親	35.7	
母親	35.7	
配偶者	35.7	
子ども	39.3	
その他	10.7	

表2-5は「親との間柄はうまくいっているか」を6段階で聞き、まとめたものである。「とても」「かなり」うまくいっていると答えている比率は全体で46.1%、特に女子では52.2%、3年生が54.2%となる。一方、「かなり」「ぜんぜん」うまくいっていないと答えている比率は全体で8.9%である。全般に低い比率だが、そうした中で2年生16.2%、1年生13.0%が高い数値となっている。

図2-1は、朝起きる時間を時間帯別にまとめたものである。「朝6時以前」に起きて

いる者が20.5%と5人に1人いるのは驚きである。一般に昼間働くとか、全日制高校に通う生徒の多くが起きる6時以降、8時までの時間帯に起きる定時制の生徒は40.2%である。

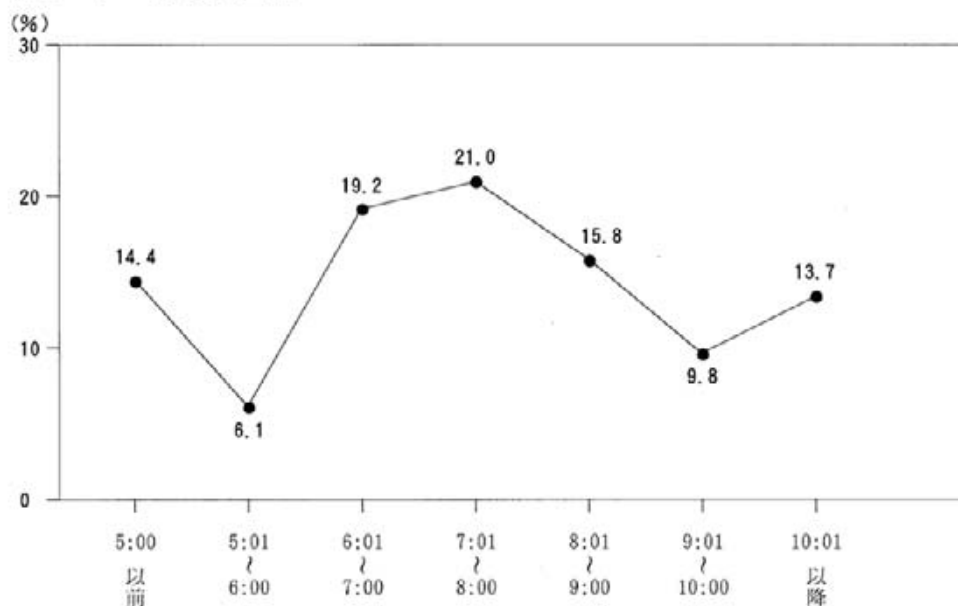
図2-2は、「朝食のようす」を学年別にまとめたものである。全体では「1人で自宅で食べる」が最も多く36.8%、次いで「家族の誰かと食べる」29.2%、「朝食は食べない」27.9%の順である。1年生では「1人で食べる」が44.4%、「家族と食べる」が35.2%と、ともに他の学年に比べ際立って高い数

表2-5 親との間柄はうまくいっているか (性・学年別)

	全 体	性 別		学 年 別			
		男 子	女 子	1 年	2 年	3 年	4 年
		(%)					
うまくいっている	46.1	44.2	52.2	44.7	42.6	54.2	43.0
うまくいっていない	8.9	8.7	9.3	13.0	16.2	7.6	11.8

「うまくいっている」は、「とても」+「かなり」
 「うまくいっていない」は、「かなり」+「ぜんぜん」

図2-1 朝起きる時間

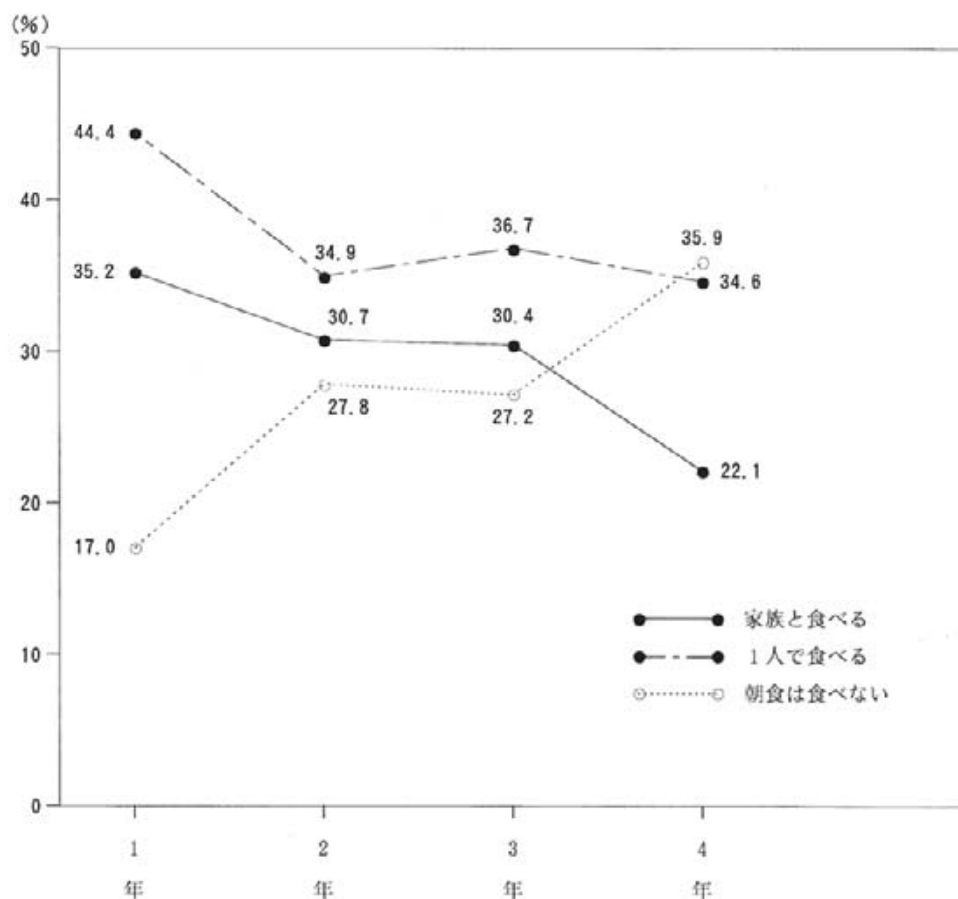


値である。「1人で食べる」「家族と食べる」は仕事やアルバイトをする率が上昇する上級学年ほど下がる傾向を持つのに対し、「朝食を食べない」比率は逆に学年進行で上昇し、特に4年生では35.9%を占める。1年生は後述するように、アルバイトや仕事をする率がまだ高くなく、昼間テレビやマンガを見たり、ぶらぶら過ごす率が高いことから推測すると、起きる時間が不安定で家族の生活時間と合わない者が多いのではなかろうか。その結果、「1人で食べる」比率が高く、また「親とう

まくいっていない」者も比較的多くいるように思われる。

一方、4年生は、仕事やアルバイト中心の生活ができ上がっているのに、「朝食は食べない」者が多いのは、かなり時間的に忙しい日常生活を送っているためであろう。「1人で朝食をとる」比率や「親との間柄がうまくいっていない」比率が下がってくることは、仕事や定時制高校の生活などを通じ、外に世界が広がっていく明るい傾向でもある。

図2-2 朝食のようす（学年別）



2. 登校までにしていること

現在、定時制高校といっても昼間通う形態をとる所もあるが、多くの学校では全日制と併設され夜通う形態をとる。すなわち、全日制のクラブ活動が終わり下校に移る夕方5時頃から定時制の生徒の登校が始まり、5時30分から夜9時前後まで40分4時間の授業が、給食の時間をはさんで行われる。9時前後に授業が終了すると、簡単に教室を片づけて早々に下校が始まるが、なかには10時頃までクラブ活動をしてから下校する生徒もいる。こうした夕方から夜にかけての学校生活に対し、登校してくるまでの昼間はどのように過ごしているのか、また昔の定時制高校生のように、勤労学生の生活スタイルが今もあるのかについて検討してみたい。

「ふだん登校までにしていること」を、「いつも」「わりと」しているなど4段階で調査

した。図2-3は男女別、図2-4は学年別にグラフ化したものである。男女比較では、「家事をする」で女子が、「友だちと遊ぶ」「街をぶらつく」では男子がそれぞれ大きな数値を示す。学年別では1年生が「仕事・アルバイトをする」比率が他学年中で一番低く49.4%、逆に、「家事をする」が40.2%と他学年中で一番高い比率を示す。2年生、3年生は「仕事・アルバイトをする」が60%を超えているが、「何となく過ごす」は60%前後、「テレビ・マンガを見る」が50%後半を示す。これに対し4年生は、「仕事・アルバイトをする」が66.9%となり、「街をぶらつく」を除く他の調査項目は全て他の学年中最も低い比率を示し、仕事・アルバイト中心の生活意識になっていることをうかがわせる。

図 2-3 登校までにしていること（性別）

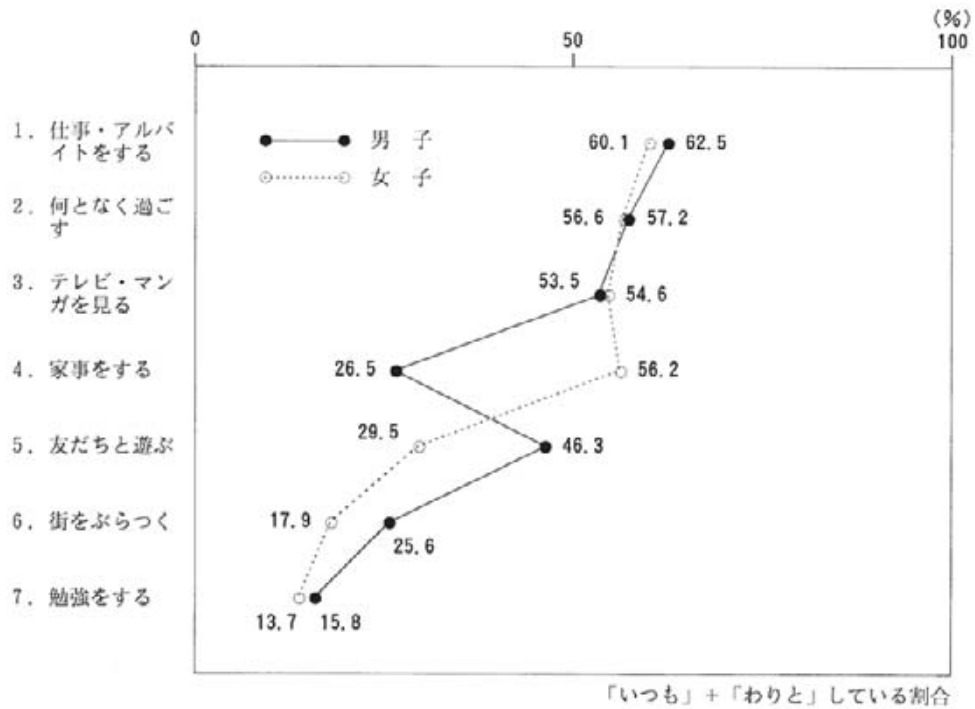
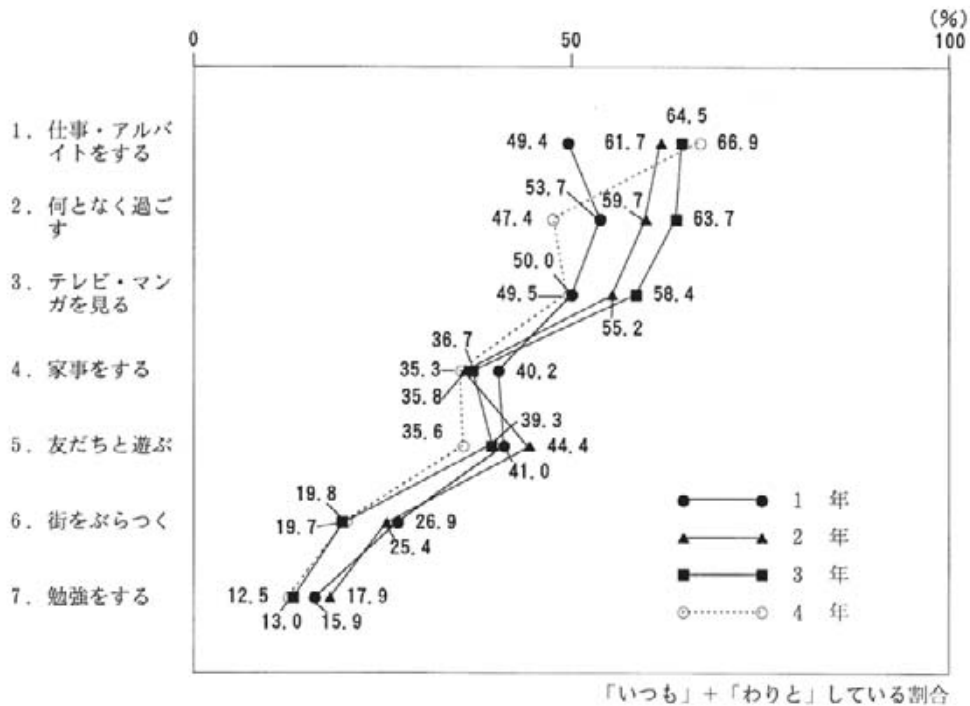


図 2-4 登校までにしていること（学年別）



3. 通学のようにす

表2-6はどのように通学しているか、そのようすをまとめたものである。全体では68.8%が「家から」の通学であり、62.0%が学校まで「30分未満」の通学時間である。また通学方法では「徒歩・自転車」が37.1%である。男女別では、女子は「家から」の通学が70.3%と目立ち、男子は「30分未満」の通学時間の生徒が64.8%で、女子より9%も多い。また「徒歩・自転車」通学者は女子の29.4%に対し男子40.7%と、男子の比率が目立つ。これは下校時間が夜の9時台以降となり暗い夜道となるため、女子の方がより安全な経路・方法を選ぶことに原因する。

学年別では、1年生は「30分未満」が75.0%、「徒歩・自転車」が56.7%と他の学年に比べ目立って多い。これがアルバイトをする比率の上がる2年生になると、「45分以上」の通学時間の生徒が20.7%と5人に1人とな

る。仕事・アルバイト中心の生活意識を持つ4年生では、「職場から」の通学者が31.7%となり、「バイクや乗用車」を使った通学が25.9%と、4人に1人の比率となる。それでもなお「45分以上」の通学時間の生徒が23.3%となるのは、安定した職場を多少遠い距離の所であっても求め、その分、乗用車やバイクを使った通学でカバーしているものといえる。

2年生と3年生を比較してみると、2年生はアルバイトをする率が急上昇することを受けて「45分以上」の通学時間の生徒が1年生より2倍も多くなるのに対し、3年生では「30分未満」が増え、「45分以上」の通学者は減る。「バイクや乗用車」での通学者が21.3%となることにも原因するが、18歳の年齢条件から、家なり学校の近くに新しい職場を求めやすいことも1つの原因と推測される。

表 2 - 6 通学の様子 (性・学年別)

(%)

	全 体	性 別		学 年 別			
		男子	女子	1 年	2 年	3 年	4 年
家からの通学	68.8	68.2 <	70.3	67.4	70.3	70.5	65.4
職場からの通学	28.0	27.6	28.7	23.3	26.6	26.4	31.7
30分未満の通学時間	62.0	64.8 >	56.0	75.0	59.1	63.1	57.0
45分以上の通学時間	18.0	15.6	23.0	10.2	20.7	13.8	23.3
徒歩・自転車で通学	37.1	40.7 >	29.4	56.7	36.7	33.2	29.5
バイク・乗用車で通学	18.2	22.3 >	10.1	10.0	14.6	21.3	25.9

○は最大値

4. 仕事の実態と意識

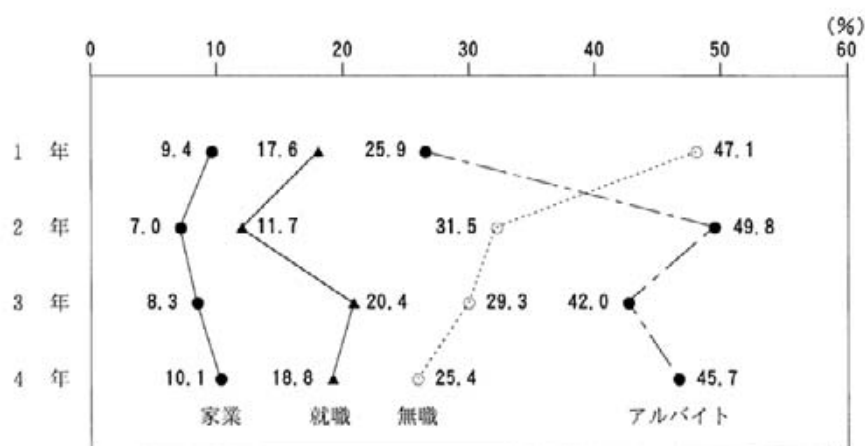
今までも検討してきたように、現在の定時制高校生の多くは、家族と同居しながら、学校に徒歩や自転車で通える近くに住んでおり、昼間、仕事やアルバイトをして過ごしているという平均像が明らかになった。そこで、ここでは仕事の実態と意識について検討してみたい。

現在働いているかを、「就職」「アルバイト」「家業の手伝い」「特に仕事はしていない」の4項目で調べると、全体では、「アルバイト」43.3%、「就職」16.5%、「家業の手伝い」8.4%、「何もしていない」31.8%となった。つまり、何らかの形で仕事をしている生徒が68.2%いる。図2-5はこうした就業状況を学年別にグラフ化したものである。1年生は「無職」が47.1%と約半数を占めるが、2年生以降はアルバイトを中心に仕事を持つ生徒が7割となる。仕事を持つといっても就業形態別に分けて検討してみると、「就

職」、すなわち定職を持つと答えているのは、1年生で17.6%、2年生で減って11.7%、3年生で再び増えて20.4%となる。これは中学卒業時に一度正規に就職する生徒がいるものの2年生までに離職する傾向があるが、「18歳以上募集」の多い現在の求人年齢に達する3年生で再び正規就職する生徒がいることの現れと思われる。「アルバイトをしている」は1年生では4人に1人の比率であるが、2年生で49.8%と約2人に1人となる。これを定時制高校生の中で働いている生徒全体の比率でみると、2年生では7割、3・4年生では多少下がるものの約6割を占め、一番多い就業形態となっている。

何らかの形で働いている生徒に対し、「特に仕事はしていない」生徒が全体で31.8%いる。1年生では47.1%と約半数を占めているが、学年進行で減少するものの、4年生でも25.4%と4人に1人は何もしていない。これ

図2-5 現在、働いているか（学年別）



は現在の定時制高校生の特色の1つである。

表2-7は、現在、働いている生徒に働いている理由を、働いていない生徒に働かない理由を問うたものである。働いている生徒の71.8%が「働くのが当然である」と考えている。とりわけ女子は75.0%、1年生では82.0%が「当然」と考えている。アルバイト率が急増する2年生では、「お小遣いが足りない」が72.4%と一番高い比率を示している。3年生では他の学年に比べ各項目ともに数値が落ち込み、働く理由があいまいになっている。事実、図2-5でみるように、就職率が上昇する反面、アルバイトの比率が下がっている。3年生は「18歳求人」によって仕事に就いたり、仕事について考える機会が拡大す

る一方、1・2年生の仕事やアルバイトの経験から、建前的な理由ではなく、多様な理由が存在するように思われる。

これに対して、働いていない生徒の働かない理由は、どの調査項目も全体集計では50%以下で、多様な理由に拡散している。「気に入った仕事がない」は男子の40.4%に対し、女子は55.4%と際立っている。また、3年生では50.9%である。定時制の4年間を通いづけるためには、生活リズムをつくることが大切であり、そのためには昼間仕事を継続的にすることが1つの有力な方法といわれる。その意味では3年生を中心とした意識の低下に対し、学校としても就職指導を適切に行うことが有効であることが、このデータからも

表2-7 働いている人の働く理由・働いていない人の働かない理由（性・学年別）

		(%)						
		全 体	性 別		学 年 別			
			男子	女子	1年	2年	3年	4年
働 く 理 由	働くのが当然	71.8	70.4 <	75.0	82.0	70.0	64.9	78.1
	お小遣いが足りない	68.3	69.1 >	66.6	63.2	72.4	65.9	67.1
	昼間することがない	52.9	55.5 >	47.2	57.2	58.6	45.3	50.1
働 か な い 理 由	気に入った仕事がない	45.0	40.4	55.4	40.5	44.4	50.9	43.5
	遊びたい	17.7	21.2	9.5	16.7	18.0	16.0	18.5
	働きたくない	13.9	15.2	10.8	17.1	14.0	13.8	7.9
	経済的に困っていない	13.2	15.6	7.8	17.1	7.1	14.3	18.9
	勉強がしたい	12.5	13.2	11.0	10.0	11.2	12.3	17.9
	家族が許さない	4.9	4.3	6.2	7.5	1.4	3.6	10.5

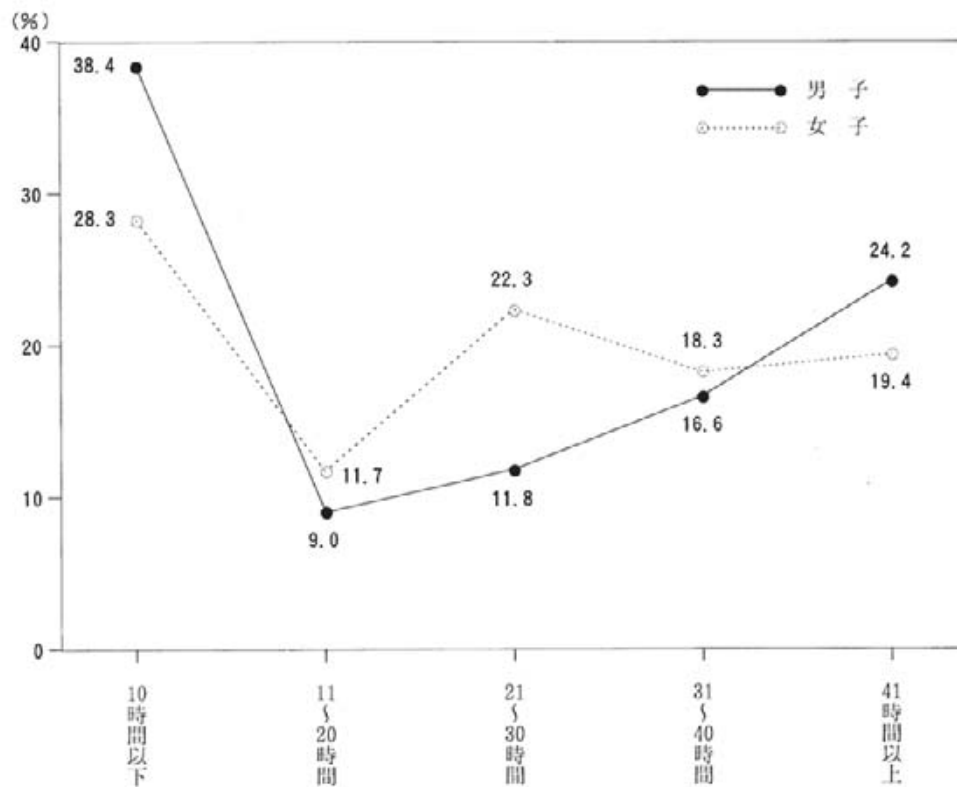
「ととも」+「わりと」その割合

わかる。

図2-6・7は週あたりの勤務時間を男女別、学年別にまとめたものである。週あたり

「10時間以下」が全体では35.3%を占める。週6日間、1日3時間ないし4時間働いたとするならば合計でも週30時間以下となるが、

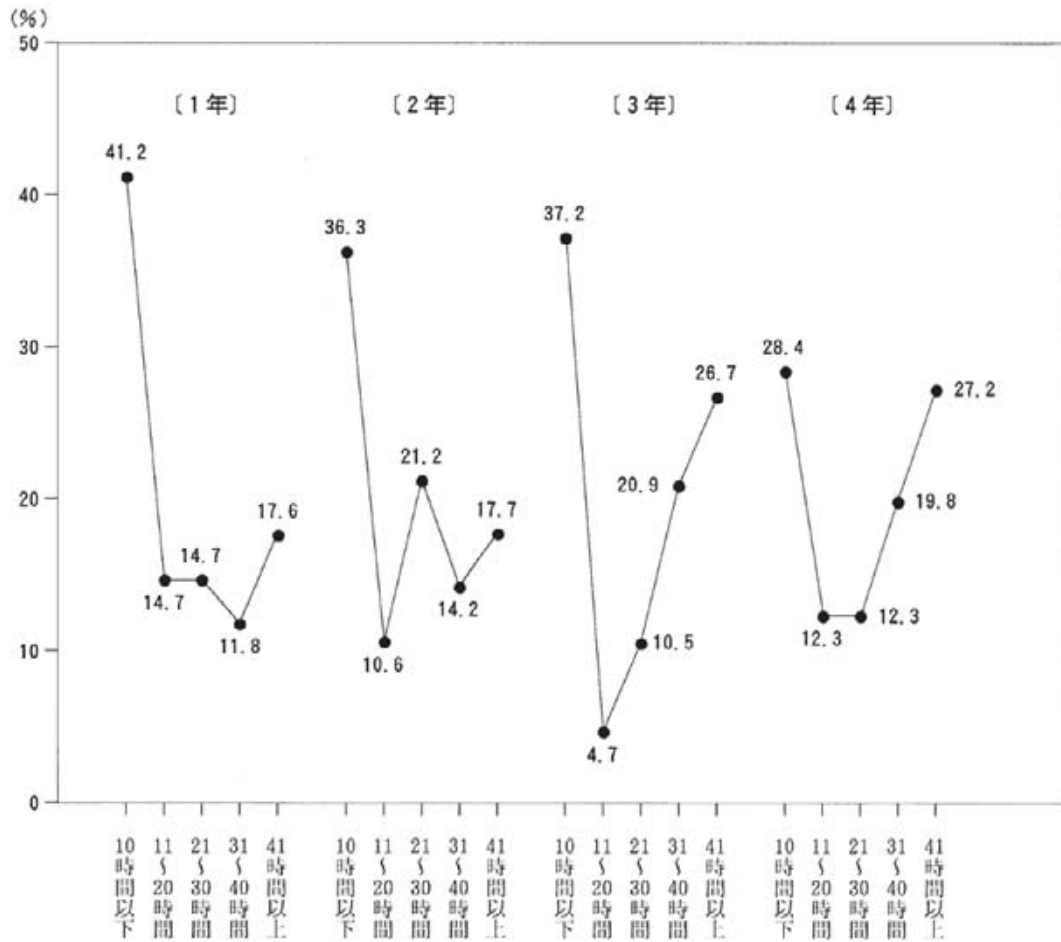
図2-6 週あたりの勤務時間（性別）



この「30時間以下」に入る生徒が全体で60.4%である。すなわち、働いている生徒の多くは1日3時間から4時間程度の仕事であると

いえる。「31時間以上」働いている生徒は、1・2年生では3割程度、3・4年生になると4割を超えるようになる。

図2-7 週あたりの勤務時間（学年別）



この勤務時間に関連して収入を月単位でまとめたものが表2-8である。月「5万円以下」の生徒が全体で14.8%、女子では18.8%いる。「10万円以下」でまとめると、全体では53.8%、女子では62.4%となる。全体に収入はそう多くはない。

次に、就業形態別にその特色を検討してみたい。アルバイトをしている生徒は、図2-8に示されるように「朝食は食べない」が38.6%と最も高い。また表2-9の「通学のように」に示されるように、通学は「家から」が6割、「職場から」が4割であるが、通学時間は「30分未満」が62.7%、「バイク・乗用車」での通学が23.6%と他の就業形態より高い比率を示している。勤務時間では1週間「20時間以下」が46.2%、「30時間以下」でまとめると67.2%となる(表2-10)。収入では月「10万円以下」が63.3%、最も多い収入帯は「6万~10万円」の46.7%である(表2-11)。働く理由は「お小遣いが足りないから」が74.1%であり(表2-12)、通学方法で「バイク」を利用している者が16.9%と他の就業形態に比べ高い比率を示している(表2-13)。すなわち、アルバイトをしている生徒の多くは、小遣いかせぎのためにそう多くない時間、家や学校の近くで働いていて余裕があり、登校までに「友だちと遊ぶ」比率が39.7%と他の就業形態と比べ最も多い(表2-14)。

就職をしている生徒は、約6割が「30分未満」の通学時間であり、「職場から」の通学である(表2-9)。1週間の勤務時間は、「41時間以上」が41.5%(表2-10)。1か月の収入は「16万円以上」が32.0%いる(表2-11)。働く理由は89.9%が「働くのが当然」と考えている(表2-13)。また収入が多いだけに、「収入の一部を家に入れている」者は58.2%、「少しでも学費を自分で出している」者が73.9%を示す(表2-15)。ここには従来の定時制高校生の持っていた勤

労学生の生活がうかがえる。

これらに対し家業の手伝いをしている生徒は「朝食を家族と食べる」比率が55.1%(図2-8)。当然ながら、そのほとんどが「家から」の通学者であるが、「30分未満」の通学時間の者が他の就業形態に比べると少なく、「45分以上」かかる者が22.0%と比較的多い。それは「徒歩・自転車」での通学者が42.0%と最も多いことにも起因している(表2-9)。勤務時間は1週間「10時間以下」が52.9%、「30時間以下」でまとめると70.6%にもなる(表2-10)。しかし、収入面では月「10万円以下」が58.3%であるのに対し「16万円以上」もらっている者が33.4%もいて、就職者の比率を上回る(表2-11)。働く理由は「昼間することがない」が64.2%と極めて消極的である(表2-12)。登校までにしていることのトップは「家事をする」68.1%、次いで「テレビ・マンガを見る」57.8%、「何となく過ごす」51.1%の順である。また、家族とともに生活しているためか、「友だちと遊ぶ」「街をぶらつく」は他の就業形態に比べると低く、逆に「勉強をする」が36.4%と最も高い比率を示している(表2-14)。すなわち、家業の手伝いの形で働いている生徒は、とりわけ少しだけ手伝っている者が多いこと、家中心で友だちと遊ぶことなどが少ないことがわかった。

世の中には、様々な就業形態があり、様々な仕事がある。しかし、夕方5時30分までに確実に学校に通える距離・時間の条件を満たす仕事はそう多くない。また、ほとんどの求人が高校卒業を暗黙の条件とする「18歳以上」である。さらにパートなどでも雇う側の勤務条件は不況が長期化している下ではますます厳しいものがある。定時制に通う生徒の働き口は一見たくさんあるようで、実はそう多くないものと考えられる。しかし、今までに検討してきた通り、生徒諸君はよく努力して仕事を持っている例が多いことがわかった。

表2-8 働いている人の1か月の収入（性・学年別）

	(%)						
	全 体	性 別		学 年 別			
		男子	女子	1年	2年	3年	4年
5万円以下	14.8	12.9 <	18.8	18.1	9.1	14.5	
6万～10万円	39.0	38.6 <	34.2	47.6	40.2	27.6	
11万～15万円	23.1	21.1 <	31.3	17.1	22.1	29.0	
16万～20万円	13.8	18.6 >	6.3	8.6	19.5	18.4	
21万円以上	9.3	10.8 >	9.4	8.6	9.1	10.5	

○は最大値

図2-8 朝食のようす（就業形態別）

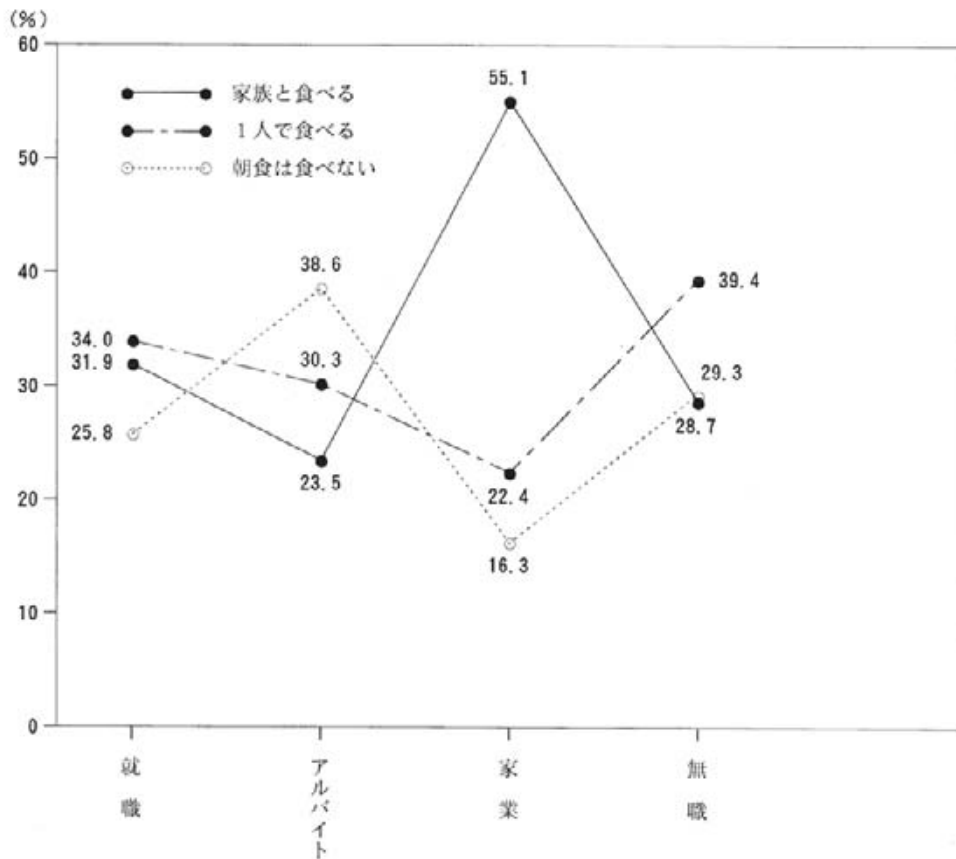


表 2 - 9 通学の様子 (就業形態別)

(%)

	全 体	就 業 形 態 別			
		就 職	アルバイト	家 業	無 職
家からの通学	68.8	35.7	57.5	86.0	95.2
職場からの通学	28.0	60.2	40.9	12.0	0.0
30分未満の通学時間	62.0	57.3	62.7	58.0	63.5
45分以上の通学時間	18.0	17.7	18.5	22.0	17.8
徒歩・自転車で通学	37.1	40.9	29.5	42.0	42.8
バイク・乗用車で通学	18.2	22.5	23.6	18.0	8.0

○は最大値 (無職を除く)

表 2 - 10 週あたりの勤務時間 (就業形態別)

(%)

	全 体	就 業 形 態 別		
		就 職	アルバイト	家 業
10時間以下	35.3	34.5	33.8	52.9
11~20時間	9.8	3.4	12.4	11.8
21~30時間	15.3	3.4	21.0	5.9
31~40時間	17.1	17.2	17.6	11.8
41時間以上	22.5	41.5	15.2	17.6

○は最大値

表2-11 働いている人の1か月の収入（就業形態別）

(%)

	全 体	就 業 形 態 別		
		就 職	アルバイト	家 業
5万円以下	14.8	7.7	16.6	33.3
6万～10万円	39.0	21.8	46.7	25.0
11万～15万円	23.1	38.5	17.6	8.3
16万～20万円	13.8	19.2	11.6	16.7
21万円以上	9.3	12.8	7.5	16.7

○は最大値

表2-12 働く理由（就業形態別）

(%)

	全 体	就 業 形 態 別		
		就 職	アルバイト	家 業
働くのが当然	71.8	89.9	67.3	55.5
お小遣いが足りない	68.3	56.2	74.1	52.0
昼間することがない	52.9	38.4	57.8	64.2

「とても」+「わりと」その割合
○は最大値

表2-13 通学の方法（就業形態別）

(%)

	全 体	就 業 形 態 別		
		就 職	アルバイト	家 業
バイク	12.1	8.2	16.9	8.0
乗用車	6.1	14.3	6.7	10.0

○は最大値

表 2-14 登校までにしていること（就業形態別）

(%)

	全 体	就 業 形 態 別			
		就 職	アルバイト	家 業	無 職
仕事・アルバイトをする	61.7	96.9	90.4	47.9	6.9
何となく過ごす	57.0	45.9	47.4	51.1	74.0
テレビ・マンガを見る	53.9	39.5	45.9	57.8	67.6
家事をする	36.7	34.3	37.8	68.1	37.5
友だちと遊ぶ	40.6	36.7	39.7	24.4	47.4
街をぶらつく	22.9	11.1	22.1	18.2	30.6
勉強をする	15.1	12.3	12.3	36.4	14.1

「いつも」+「わりと」している割合
○は最大値（無職を除く）

表 2-15 働いて得たお金の使い方（就業形態別）

(%)

	全 体	就 業 形 態 別		
		就 職	アルバイト	家 業
部でも家に入れる	51.7	58.2	51.6	28.6
少しでも学費を自分で出す	36.8	73.9	45.2	18.4

○は最大値

さて、「働いて得たお金を一部でも家に入れる」生徒は全体で51.7%、それを学年別に表示すと図2-9のようになる。また、定時制高校の学費を「一部でも自分で出している」生徒は学年進行で増加し、4年生では「全部自分」が42.8%、「一部は自分」が10.8%、合わせて53.6%が一部以上自分で出している(図2-10)。働いている生徒の56.6%が「肉体的に疲れる」と嘆きつつ、仕事と学校との

両方をがんばっている姿がここにある(図2-11)。

以上のように、現代の定時制に通う生徒たちは、昔のような初めから「勤労学生」の意識や生活スタイルを持っているわけではないが、多くの生徒の場合、学年進行で「働きながら学ぶ」スタイルと意識を身につけていることがわかってきた。

図2-9 働いて得たお金を家に入れているか(学年別)

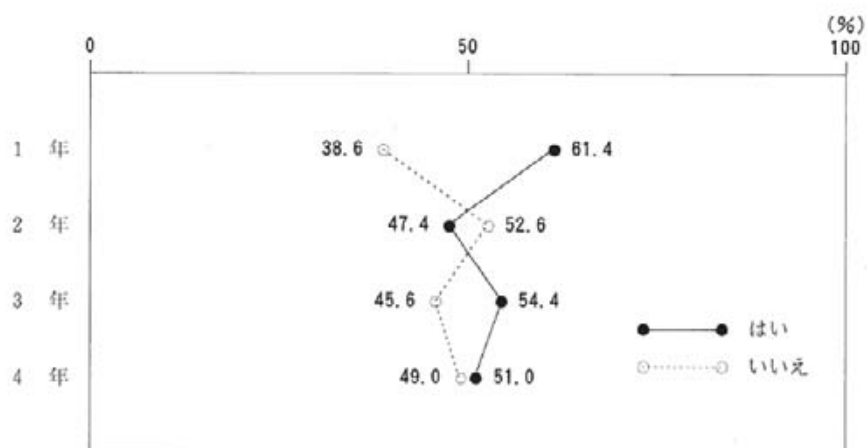


図 2-10 定時制高校の学費を払っている人（学年別）

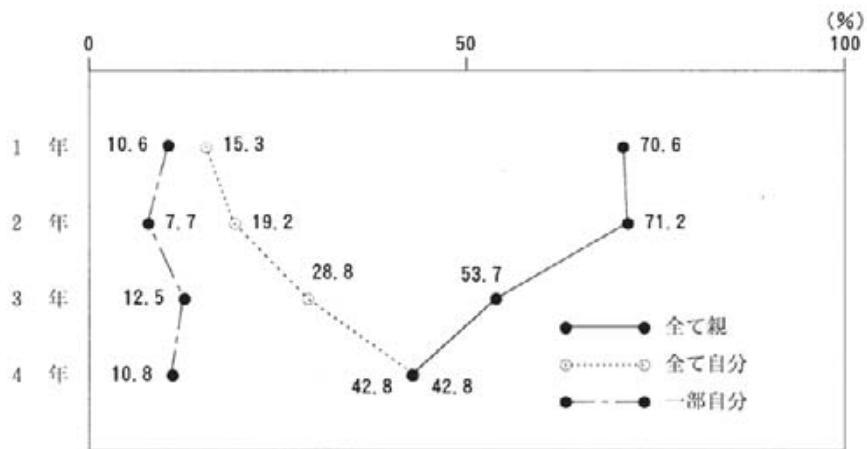
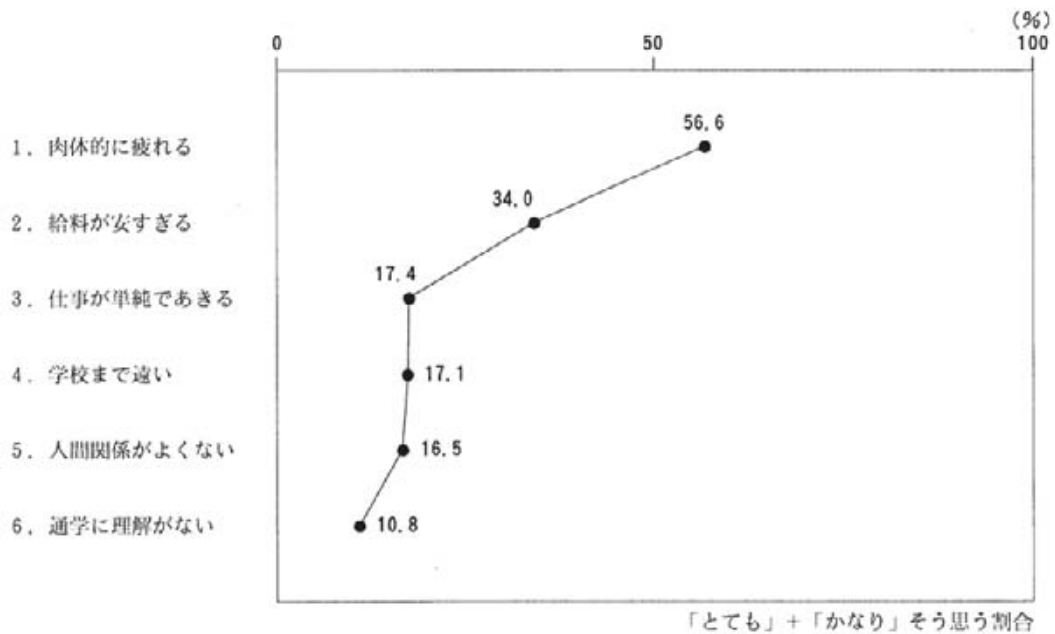


図 2-11 働いている人の悩み



第 3 章

定時制高校生の高校選択の 要因と学校の現状評価

定時制高校に通うようになった生徒たちは、どのような背景や理由から定時制という課程の学校を選んだのだろうか。そして、現在通っている学校や学校生活をどのように評価

しているのだろうか。生徒たちの意識を探ることによって、定時制教育の今日的役割とその意義について検討を加えてみたいと考えたのが本章である。

1. 定時制高校に至るまでのキャリア——

勉学の間として定時制という課程を選んだ要因が何であったかを知る手がかりとして、定時制に通うようになった生徒たちのキャリアを尋ねたのが表 3-1 である。

一見してわかることは、全日制高校とは違って多様なキャリアの生徒が通っているということである。全日制高校に通う生徒の場合は、第一志望校であったか否かは学校ランクによって差はあるが、中学校を卒業してストレートに進学してくる者が大多数であろう。ところが、定時制高校生の場合は、中学校を卒業してすぐに進学してきた者の占める割合は、「第一志望ではなかった」というのが 29.8%で、「第一志望だった」というのが 23.5%、合わせても 53.3%と 5割にすぎないのである。そして、「第一志望ではなかった」という者たちの多くは、おそらく全日制高校を第一志望校にしていたのであろうと思われ

るので、最初から定時制に進学したい、あるいは定時制にしか進学できないと考えていた生徒は、現在定時制に通っている生徒の約 4分の 1 にすぎないといえよう。

一方、「全日制高校を中退して入った」者が 20.5%を占めている。「全日制高校を複数転学したあとで入った」者 (2.7%) や「全日制高校を中退して一度社会に出てから、また入った」者 (8.8%) を加えると、全日制高校中退・転学経験者は 32.0%と 3割に達するのである。定時制高校が、種々の問題をかかえて全日制で学業不振や未履修となった生徒たちの受け皿的役割を担わされていることが、この数字からは読み取れる。

また、一度社会に出た経験者で、全日制高校を中退した者 (8.8%) と中卒者 (4.8%) と定時制高校を中退した者 (2.8%) とを合わせると 16.4%になる。一度社会に出てから

勉学の必要を感じて高校に行く決心をした者たちにとって、働きながら学べる定時制高校は全日制高校に比して広く門を開けてくれたのであろう。

生涯教育の視点からも、高校中退者や中卒者で一度社会に出た者の勉学の場としての定時制高校の役割は、今後とも重要といえよう。

表3-1から主なキャリアを次の3つに分類することができる。①中卒後すぐに進学してきた者と、②全日制高校の中退・転学経験者と、③一度社会に出た経験者である。全日制高校を中退して一度社会に出てから入った生徒が、②と③の両方に含まれているので、②の方から彼らを除いて集計すると①+②+

③の合計は92.9%に達するのである。そこで、この3つのキャリアを属性別に集計してみたのが表3-2である。

性別では、中卒後すぐに進学してきた者が男子に多い(男子55.0%>女子50.1%)のに対して、女子では一度社会に出た経験者の割合が男子より多い(男子15.2%<女子19.2%)のが特徴である。

学年別では、中卒後すぐに進学してきた者の割合は、学年が進行するにしたがって減少している(1年61.9%>2年60.1%>3年50.4%>4年40.5%)ことが、はっきりとわかる。これに反比例して、全日制高校中退・転学経験者の占める割合は、学年が進行するにした

表3-1 定時制高校に至るまでのキャリア

	(%)
1. 中学校を卒業して <u>すぐに入</u> った (第一志望ではなかったが)	29.8
2. 中学校を卒業して <u>すぐに入</u> った (第一志望)	23.5
3. 全日制高校を <u>中退して入</u> った	20.5
4. <u>全日制高校を中退して一度社会に出てから入</u> った	8.8
5. 中学校を卒業後に <u>一度社会に出てから入</u> った	4.8
6. <u>定時制高校を中退して一度社会に出てから</u> 、また入った	2.8
7. 全日制高校を <u>複数転学</u> したあとで入った	2.7
8. <u>日本以外の国で生まれ</u> 、日本に来て入学した	1.5
9. 中学校を卒業後に <u>各種学校に入学し</u> 、そこを出てから入った	1.2
10. <u>通信制や別の定時制高校</u> から編入して入った	1.2
11. その他	3.2

がって増加しているのである。特に4年生では、中卒後すぐに進学してきた生徒(40.5%)よりも全日制高校中退・転学経験者と一度社会に出た経験者(合計で49.2%となる)の方がはるかに多くなるのである。

こうした背景には、定時制でも途中で退学していく生徒がかなりいることを物語っている。それとともに、1・2年の修了時点や2・3年の途中から全日制より中退・転学して入ってくる生徒が多くいるからであろう。

年齢別でも学年別と同様の傾向がみられる。15歳・16歳という新卒層は、8割以上がすぐに定時制に進学してきた者であるのに対して、17歳・18歳になるとすぐに進学してきた者は

5割強に減少する。これは、中卒後すぐに進学してきた者の退学が増加する一方で、全日制高校中退・転学経験者や一度社会に出た経験者が入学してくるためである。そして、ほとんどが過年度生である19歳と20歳以上では中卒ストレート組は2割弱になってしまっている。

これに対して、19歳では全日制高校中退・転学経験者が5割以上を、20歳以上では一度社会に出た経験者が5割以上を占めていることがわかる。特に17歳で全日制高校中退・転学経験者が2.8倍に増加(16歳11.1%→17歳30.6%)するのは、全日制1・2年時からの流入が多いことを意味するものであろう。

表3-2 定時制高校に至るまでの主なキャリア × 属性

(96)

	全 体	性 別		学 年 別				年 齢 別					
		男子	女子	1年	2年	3年	4年	15歳	16歳	17歳	18歳	19歳	20歳以上
① 中卒後すぐに進学してきた者	⑩第一志望でなかった者	29.8	31.8 > 25.9	30.4	(37.9)	28.1	18.4	42.4	(52.6)	32.6	23.0	10.5	1.3
	⑪第一志望だった者	23.5	23.2 < 24.2	(31.5)	22.2	22.3	22.1	(45.5)	29.6	24.3	28.3	8.8	11.5
	⑩+⑪の合計	53.3	55.0 > 50.1	(61.9)	> 60.1 > 50.4 > 40.5			(87.9)	> 82.2 > 56.9 > 51.3 > 19.3 > 12.8				
② 全日制高校中退・転学経験者 (中退者、複数転学者、全日制中退後一度社会に出た者の合計)		32.0	32.4 > 31.3	21.4 < 29.7 < 33.1 < (41.1)				3.0 < 13.3 < 35.5 < 39.8 < (52.6)	43.6				
		[23.2]	[23.4 > 22.7]	[12.4 < 22.3 < 22.9 < 31.5]				[3.0 < 11.1 < 30.6 < 33.6 < 35.1]	16.7				
③ 一度社会に出た経験者 (中卒後、全日制中退後、定時制中退後の者の合計)		16.4	15.2 < 19.2	18.0	11.6	(21.7)	17.7	6.1	3.9 < 6.3 < 10.7 < 33.3 < (56.4)				

[] 内の数値は全日制中退後一度社会に出た者を除いたものである。
 >は10%未満の差を示す >>は10%以上の差を示す
 ○ は各項目の最大値 ~~~ は各項目の最小値

2. 定時制高校選択の要因

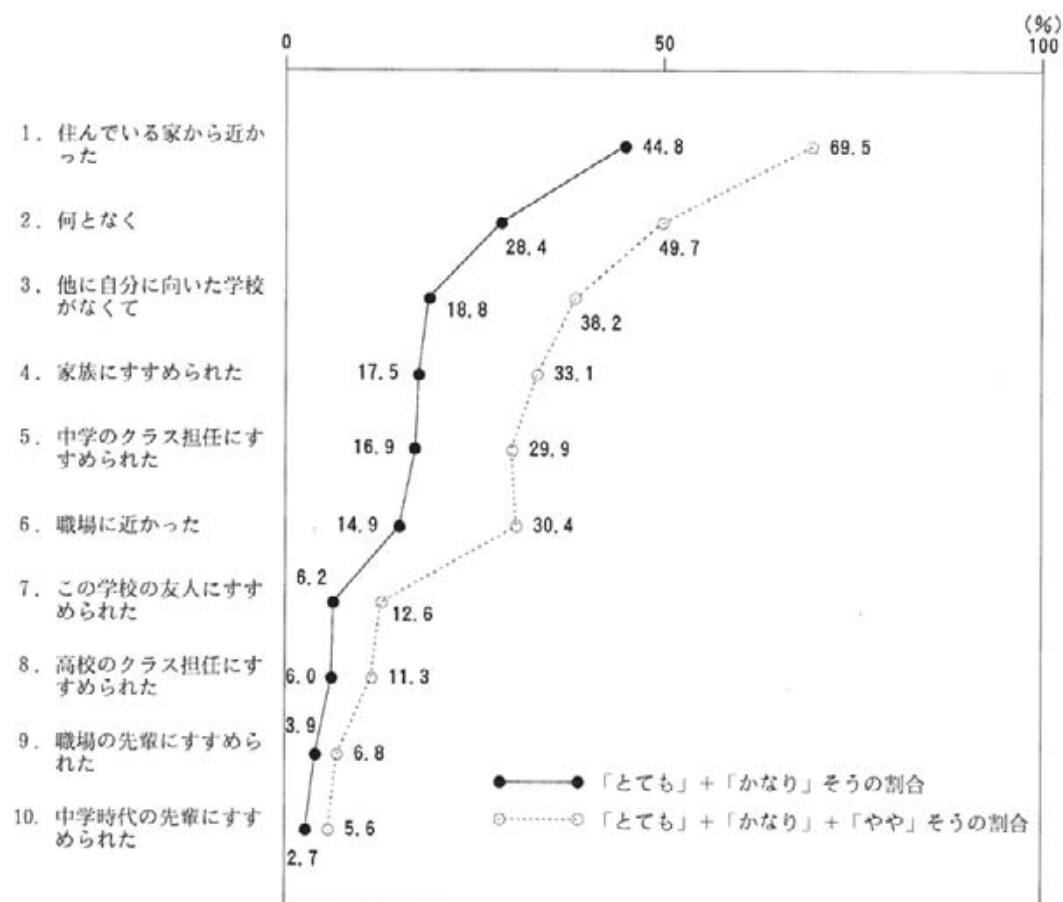
多様なキャリアを持つ生徒たちが、進学先として定時制高校を選んだ際に、学校との距離やその学校についての情報を持つ人々とのかわりなどの外的要因は、どの程度影響したのだろうか。この点を問うたのが図3-1である。

ここからは、生徒の「住んでいる家から近かった」(44.8%、「ややそう」という消極的な意向も含めると69.5%)という理由が第1位となっている。次いで「何となく」(28.4%、「ややそう」も含めて49.7%)があげられている。この他の項目は「ややそう」を含めてもあまり選択要因としては重視していなかったことがわかる。予想以上に家族や中学のクラス担任などからのアドバイスは重視さ

れていなかったといえよう。また、職場からの距離も家からに比べると3分の1にすぎなかったことがわかる。

こうした中で、家からの距離が最も重視されていたということは重要である。授業が終了するのは9時近くであり、その後クラブ活動まですると、下校は10時近くになってしまう場合もある。そうした状況を考えると、できるだけ家の近くの学校に通いたいというのは、定時制に通う生徒たちにとっては大切な選択要因であったといえよう。通学時間が「30分未満」の者が62.0%を占めている(P.17表2-6参照) 現実には、このことを如実に物語っている。

図3-1 この学校を選んだ理由



次に、定時制の内容や特色などについてはどの程度意識して選択していたのであろうか。この点を問うてみたのが図3-2である。全体的に生徒たちが共通して、特に意識した項目は少なかったことがわかる。「ややそう思った」という消極的な選択理由まで含めて5割を超えたのは、「働きながら学びたかった」(61.2%)と「自分の性格は定時制高校の方が向いていると思った」(57.0%)の2つだけである。定時制側では特色としてよく強調している少人数授業(「とても」+「かなり」そう思った割合は13.5%、以下同じ)やじっくりと勉強を教える(17.8%)などの項目は、あまり選択要因には考えていなかったことがわかる。

ただし、この低い数値は、生徒たちが定時制の内容や特色などを必ずしも事前によく吟味していなかったということを示すものではない。多様なキャリアを持つ生徒たちの選択要因は、共通するよりもむしろ多様であったことを示しているともいえよう。

性別では、女子は「働きながら学びたかった」(46.1%)が一番高く、男子は「希望した全日制高校に入れなかった」(32.3%)が一番選択要因としては高かった。また女子には、「定時制高校の先生はあたたかいと思った」(男子18.4%<女子28.3%)や「生徒指導がゆるやかだと思った」(男子17.0%<女子27.6%)など、定時制高校に対する期待度が男子より1割程度高かったことがわかる。

図 3-2 定時制高校選択の理由

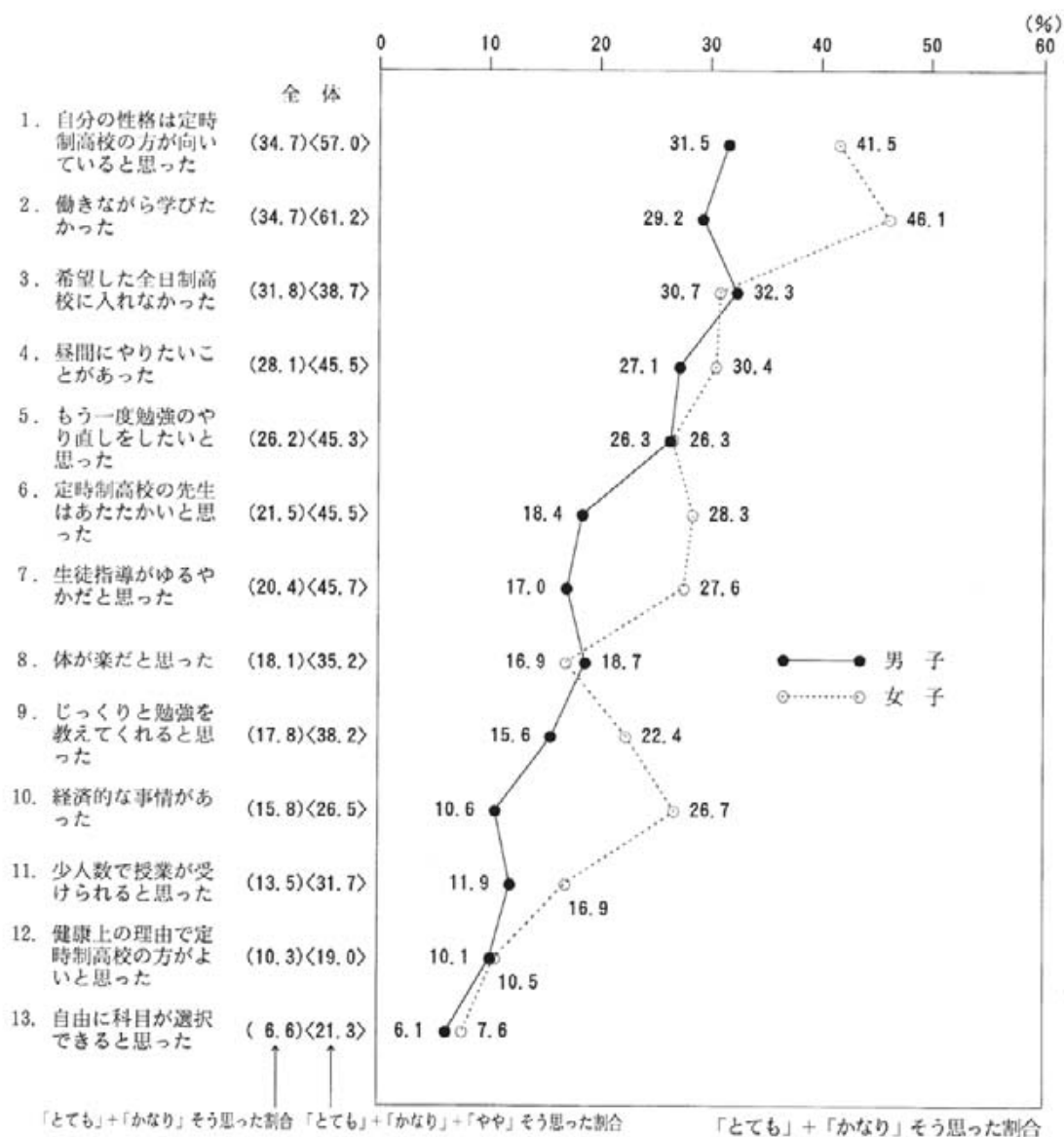


表3-3から就業形態別とキャリア別の特徴をみると、「働きながら学びたかった」と「昼間にやりたいことがあった」の項目では、就職している者の比率が他の就業形態別の層よりは10%以上高いことがわかる。また、「もう一度勉強のやり直しをしたいと思います」という項目をキャリア別でみると、一度社会に出た経験者の肯定率は50%以上で圧倒的に高いことがわかる。

さらに、年齢別でみると、15歳の新卒者たちの選択要因の第1位は62.0%の者が「希望した全日制高校に入れなかった」をあげている。これに対して過年度生である20歳以上の者たちでは、「もう一度勉強のやり直しをしたいと思います」という理由をあげている者が55.2%で、「ややそう思った」まで含めると79.1%と8割に達しているのである。成人に達した生徒たちにとって、再勉強の場として定時制高校は入りやすい学校だったのである。

ところで、生徒たちの定時制選択の要因は多様であったし、定時制の内容や特色につい

てあまり意識しなかった者も多かったのに、なぜ定時制高校を彼らは選んだのだろうか。その理由の一端を知ることができるのが図3-3である。

高卒資格の必要度を問うたものであるが、「なんとしても必要」が51.4%と過半数おり、「かなり必要」まで含めると77.1%と生徒の4分の3以上に達している。「やや必要」まで含めると92.5%に上っている。この傾向は、性別、学年別、年齢別にかかわらず、高卒資格の必要度は大変高いのである。

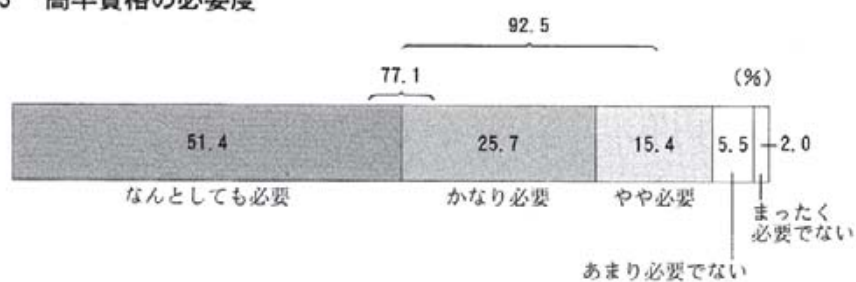
大学への進学だけを考えるならば、大検を受けて受験資格を得る道があるし、事実、全日制中退者などを対象とした塾や模試も結構盛んになっている。しかし、よりよい就職先や大学以外の専門学校などの上級教育機関への進学を考えると、高卒資格はどうしても必要なのである。こうしたことを考慮すると、生徒たちが定時制高校を選択する最大の要因は、高卒資格の取得にあったとみても過言ではあるまい。

表 3 - 3 定時制高校選択の理由 × 属性

		働きながら学び たかった	昼間にやりたい ことがあった	もう一度勉強の やり直しをした いと思った	
就業形態別	就 職	47.8	41.7	37.6	
	アルバイト	35.1	30.9	25.6	
	家 業	36.3	23.8	29.2	
	無 職	26.5	19.7	19.8	
キャリア別	中卒後すぐに 入った者	第一志望だった者	41.4	38.0	14.3
		第一志望でなかった 者	17.7	16.0	14.4
	全日制高校中 退・転学経験 者	全日制中退者	37.7	27.3	27.9
		全日制複数転学者	50.0	46.2	25.0
	一度社会に出 た経験者	中卒後	46.1	25.0	50.0
		全日制中退後	38.8	30.6	59.2
定時制中退後		46.7	35.7	60.0	

「とても」+「かなり」そう思った割合
○は最大値

図 3 - 3 高卒資格の必要度



3. 学校の現状評価

多様なキャリアを持ち、多様な選択要因から定時制に進学するようになった生徒たちは、学校での現状をどのように認識し、評価しているのだろうか。本節ではこの点を考察してみたい。

(1) 定時制高校のよいところ

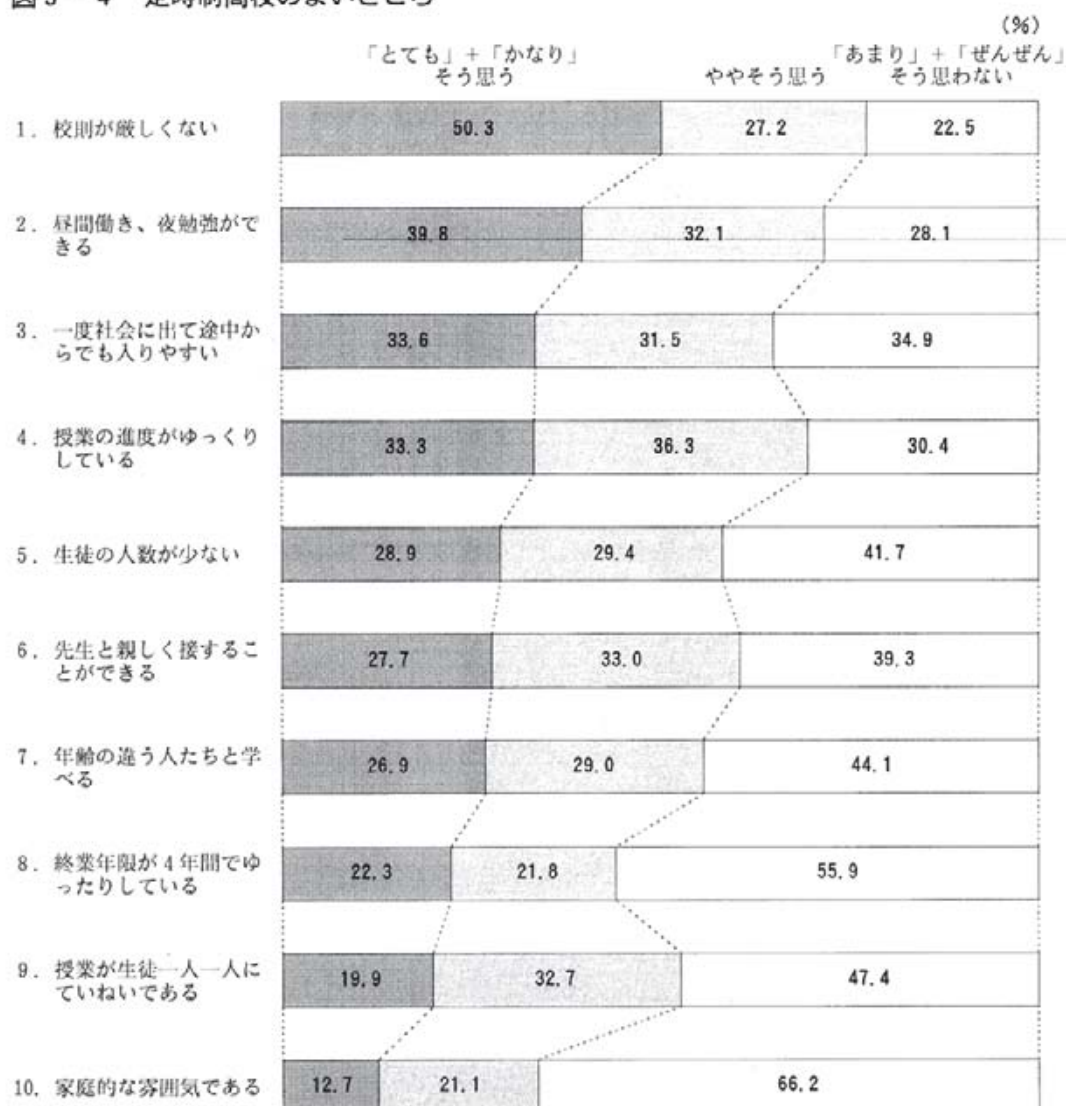
まず、定時制高校のよいところをどう感じているかを問うてみたのが図3-4である。最も強く感じているのは、「校則が厳しくない」(50.3%)ということである。「ややそう思う」という消極的な評価も含めると77.5%に達し、4分の3以上の生徒は好感を持っていることがわかる。次いで数値は低くなるが、「昼間働き、夜勉強ができる」(39.8%、消極的評価まで含めると71.9%、以下同じ)と「一度社会に出て途中からでも入りやすい」(33.6%、65.1%)と「授業の進度がゆっくりしている」(33.3%、69.6%)が続く。「昼間働き、夜勉強ができる」や「一度社会に出て途中からでも入りやすい」という評価は、定時制高校の特色であるとともに、68.2%の

生徒が何らかの形で仕事をしている現状(第2章、P.18参照)や、16.4%の生徒が一度は社会に出た経験者(P.31表3-2参照)であることの反映であると思われる。

また、大学受験をあまり意識しないで基礎・基本を教えようとしている定時制の授業の進度は、生徒たちにとっては概して好感を与えているのであろう。しかし、一方で「授業が生徒一人一人にいていいである」という項目には、積極的に評価する者が19.9%に対して批判的な評価をする者は47.4%で、積極的に評価する者の2.4倍に達している。基礎的・基本的な授業内容にもおこなわれてしまう層がいることの反映であり、進度に対する積極的評価が低い背景ともなっている。

さらに、「終業年限が4年間でゆったりしている」(22.3%)という定時制の特色には、あまり好感を持っていないことがわかる。いろいろな問題をかかえて定時制に通ってきている生徒たちにとっては、定時制の現状は必ずしもバラ色とはいえないのである。ただし、消極的な評価まで含めると、まあまあというところなのかもしれない。

図 3-4 定時制高校のよいところ



定時制高校に対する評価を属性別にまとめてみたのが表3-4である。性別では、全ての項目で女子の評価が高いことがわかる。特に「校則が厳しくない」（男子46.4%<女子58.4%）や「先生と親しく接することができる」（男子23.5%<女子36.5%）は10%以上の顕著な差がある。女子の方が男子よりも学校との人間関係を重視し、それに対する満足度が概して高かったからとも考えられる。

学年別では、1年生の評価が全般的に高いのが特徴である。「生徒の人数が少ない」や「年齢の違う人たちと学べる」や「授業が生徒一人一人にいていいである」などを評価している背景には、中学校との比較があったためと思われる。「校則が厳しくない」が2年生（50.7%）・3年生（55.2%）に高く評価されているのは、この層に中退・転学経験者が多いためである。なお、「昼間働き、夜勉強ができる」に対する評価が学年進行にしたがって低下している（1年42.2%、2年41.8%、3年37.5%、4年37.4%）のは、何らかの形で仕事についている率（1年52.9%、2年68.5%、3年70.7%、4年74.6%〈P.18 図2-5参照〉）とは反比例している。実際に仕事につきながら勉強するということはか

なりしんどいことである。上級学年になればなるほど、これを実感するのであろう。

年齢別では、やはり中学新卒に該当する15歳の評価が全体的に高いのが特徴である。特に、「授業が生徒一人一人にいていいである」を評価している者は53.1%に達し、属性別の中でも最も高い数値を示しているのである。生徒全体では19.9%とあまり高くはないことを考慮すると、中学時代にあまり勉強が得意でなかった層（定時制を第一志望とした者が45.5%で、第一志望ではなかったが全日制などを落ちて入ってきた者が42.4%で、合計が87.9%になる〈P.31 表3-2参照〉）が多い15歳の生徒たちにとっては、中学時代の授業と比較すると、一人一人にいていいであると実感できるのであろう。

また、19歳と20歳以上では一番に評価しているものは、「一度社会に出て途中からでも入りやすい」（19歳48.2%、20歳以上48.0%）という項目である。一度社会に出たり、中退したり、留年したりして何らかのかたちで挫折を経験して過年度生となった彼らにとっては、定時制高校が途中からでも入りやすいというのは実感であったといえよう。

表3-4 定時制高校のよいところ × 属性(1)

(%)

	全 体	性 別		学 年 別				年 齢 別					
		男子	女子	1年	2年	3年	4年	15歳	16歳	17歳	18歳	19歳	20歳以上
1. 校則が厳しくない	50.3	46.4<	58.4	42.4	50.7	55.2	48.8	57.6	44.7	57.7	53.2	48.1	39.2
2. 昼間働き、夜勉強ができる	39.8	39.0<	41.6	42.2	41.8	37.5	37.4	42.0	33.4	45.7	36.9	38.9	43.3
3. 一度社会に出て途中からでも入りやすい	33.6	31.6<	37.8	33.3	32.8	27.5	42.1	33.3	23.5	31.4	28.7	48.2	48.0
4. 授業の進度がゆっくりしている	33.3	32.9<	34.4	34.1	31.9	32.3	36.1	42.5	30.3	35.7	33.3	37.0	30.3
5. 生徒の人数が少ない	28.9	25.7<	35.6	38.1	30.0	26.0	24.5	33.4	34.1	28.3	29.5	31.5	19.0
6. 先生と親しく接することができる	27.7	23.5<	36.5	23.8	30.9	26.8	26.1	33.4	25.0	30.2	22.8	37.1	24.0
7. 年齢の違う人たちと学べる	26.9	24.6<	31.5	29.8	24.3	26.9	28.5	34.4	16.1	29.7	20.2	45.5	30.1
8. 卒業年限が4年間でゆったりしている	22.3	21.2<	24.6	25.3	20.0	19.2	28.0	37.6	19.9	17.3	26.4	16.7	27.4
9. 授業が生徒一人一人にいていい	19.9	17.4<	25.0	30.1	21.4	16.3	14.7	53.1	16.0	22.2	17.3	11.1	17.6
10. 家庭的な雰囲気である	12.7	11.8<	14.4	15.9	11.2	14.7	10.1	18.7	6.8	15.0	12.8	15.4	13.8

「とても」+「かなり」そう思う割合
 > は10%未満の差を示す > は10%以上の差を示す
 ○ は各項目の最大値 ~~~ は各項目の最小値

表3-5でみると就業形態別では、「昼間働き、夜勉強ができる」に対する評価が、就職者（48.9%）と無職（31.3%）で顕著な差がある。キャリア別では、「一度社会に出て途中からでも入りやすい」に対する評価で、

実際に一度社会に出た者たちの肯定率が高いことがわかる。

次に、定時制高校の現状評価と入学する前の選択要因との関係でまとめてみた。表3-6は、図3-2と図3-4からほぼ同内容の

表3-5 定時制高校のよいところ × 属性(2)

			(%)		
			校則が厳しくない	昼間働き、夜勉強ができる	一度社会に出て途中からでも入りやすい
就業形態別	就職		38.0	48.9	38.7
	アルバイト		51.6	40.2	32.4
	家業		54.3	40.9	37.3
	無職		52.2	31.3	30.4
キャリア別	中卒後すぐに入った者	第一志望だった者	51.9	41.8	30.7
		第一志望でなかった者	50.0	33.7	22.0
	全日制高校中退・転学経験者	全日制中退者	55.1	38.1	38.3
		全日制複数転学者	53.3	28.6	35.7
	一度社会に出た経験者	中卒後	46.4	51.8	51.7
		全日制中退後	40.0	46.2	48.1
		定時制中退後	64.7	53.0	41.2

「とても」+「かなり」そう思う割合
 ○ は各項目の最大値
 ～ は各項目の最小値

項目を集めて比較してみたものであるが、入る前と比較すると、実際に定時制に通うようになってからの評価が、「校則が厳しくない」の2.5倍(20.4%→50.3%)を筆頭に全ての項目

で高くなっていることが読み取れる。多様な意識を持って定時制に通うようになった生徒たちの期待は、完全ではないが、それなりに満たされていたといえるのではないだろうか。

表3-6 選択の理由と現状評価の関係

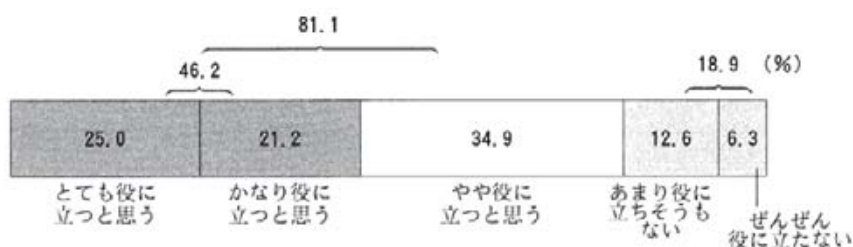
定時制高校選択の理由	「とても」+「かなり」そう思った割合		定時制高校のよいところ	「とても」+「かなり」そう思う割合
2. 働きながら学びたかった	34.7	→	2. 昼間働き、夜勉強ができる	39.8
5. もう一度勉強のやり直しをしたいと思った	26.2	→	3. 一度社会に出て途中からでも入りやすい	33.6
6. 定時制高校の先生はあたたかいと思った	21.5	→	6. 先生と親しく接することができる	27.7
7. 生徒指導がゆるやかだと思った	20.4	→	1. 校則が厳しくない	50.3
9. じっくりと勉強を教えてくれると思った	17.8	→	4. 授業の進度がゆっくりしている	33.3
		→	9. 授業が生徒一人一人にいていねいである	19.9
11. 少人数で授業が受けられると思った	13.5	→	5. 生徒の人数が少ない	28.9

(2) 授業に対する意識

ところで、定時制高校に課せられている役割は多様であるが、大切なものの1つが授業を通しての知識の伝達である。そして、定時制高校の授業は、高校を卒業する者として最低限必要と考えられる基礎・基本の学習の修得に重点をおいている。そのような勉強を生徒たちはどのように認識しているのだろうか。

まず、高校での勉強が将来に役立つかどうかを問うたのが図3-5である。「とても」と「かなり」を含めた積極的に将来役立つと考えている者は46.2%いる。過半数には達していないが、役に立たないと思っている者（「あまり」と「ぜんぜん」役に立たないの合計は18.9%）に比べると2.4倍も多い。そして消極的な意見まで含めると、将来役立つと思っている者は81.1%に達する。このことは、多くの生徒は何らかの形で高校での勉強は将

図3-5 高校の勉強は将来役に立つか



来に有用であると考えている証拠といえよう。

勉強が将来役に立つかどうかを属性別でとらえてみたのが表3-7である。

性別では、女子の方が将来役に立つと考えている割合が高い(男子44.9%<女子49.2%)。学年別では、1年生が65.9%と最も将来の有用性を評価しているが、2年生になると過半数を割り、以後学年進行にしたがって評価は減少している。第2章でみてきたように、何らかの形で仕事についている率が2年生から

急に増加している(1年生52.9%→2年生68.5%、P.18 図2-5参照)ことを考慮すると、この減少の背景には、社会経験を積むことによって高校での勉強が即、実社会で必ずしも役に立つわけではないということを体験したことが反映していると解釈できる。年齢別でも15歳と16歳が6割前後将来の有用性を評価しているのは、この層の多くが1年生だからであろう。キャリア別では、全日制高校中退と転学経験者の評価がやや低くなっている。

表3-7 高校の勉強は将来役に立つか × 属性

	全 体	性 別		学 年 別				年 齢 別					
		男子	女子	1年	2年	3年	4年	15歳	16歳	17歳	18歳	19歳	20歳以上
		「とても」+「かなり」役に立つと思う	46.2	44.9 < 49.2	65.9	48.6 > 40.3 > 36.9	60.6	58.2	40.4	34.4	47.4	43.5	
「あまり」+「ぜんぜん」役に立たない	18.9	19.6 > 17.1	6.8 < 19.2	26.1	17.3	3.0 < 15.7	22.6	24.2	21.0	15.4			
		キ ャ リ ア 別											
		中卒後すぐに入った者		全日制高校中退・転学者		一度社会に出た経験者							
		第一志望	第一志望でない	全日制中退	全日制転学	中卒後	全日制中退後	定時制中退後					
「とても」+「かなり」役に立つと思う	51.1	44.4	40.7	43.8	57.2	43.4	47.0						
「あまり」+「ぜんぜん」役に立たない	11.4	20.2	25.2	0.0	7.0	24.5	23.6						

> は10%未満の差を示す
 >> は10%以上の差を示す
 ○ は各項目の最大値
 ~~~~~ は各項目の最小値



では、何らかの形で将来の役に立つと考えている勉強の理解度はどの程度なのだろうか。「全体的にみて、現在の授業をどのくらい理解できていると思うか」を問うたのが図3-6である。

「十分」と「かなり」を合わせた授業が理解できている層が27.2%いるのに対して、「あまり」と「ぜんぜん」を合わせた22.6%の生徒は授業が理解できていない。基礎・基本を重視した平易な授業でも、理解できている生徒は全体の約4分の1にすぎないのが現状のようである。そして、約4分の1の生徒は、全日制に比べてかなりゆっくりした進度と個別指導をやっているにもかかわらず、お

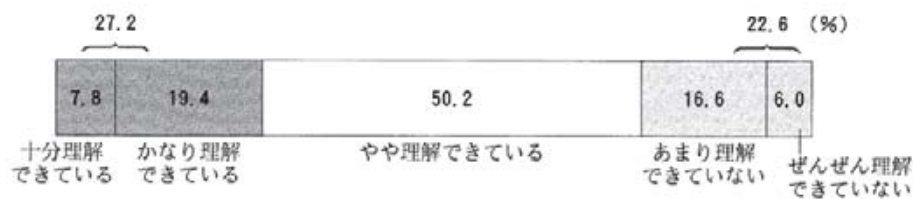
くれがちなのである。「やや理解できている」と答えた50.2%の層は、ぎりぎりでは何とがついていっている生徒たちなのである。

ただし、筆者の乏しい経験からも授業が理解できていない生徒たちにも知識欲はあったので、マンツーマンの個別指導などを充実させる時間的ゆとりやそれを可能にするための教員の増配などの措置がとられるならば、生徒の理解度を高めることはできると考えられる。

授業の理解度を属性別に比較したものが表3-8である。

性別では、男子の方が理解できている層が女子に比べてかなり多い(男子31.0%>女子19.6%、1.6倍)。さらに女子の場合は、理解

図3-6 授業の理解度





できている層が理解できていない層より少ないのが特徴である。学年別では、1年生の理解度が37.1%と一番高く、2年生以降になると4分の1ほどに減少してしまっている。2年生以降の方が授業内容が難しくなるためであろう。年齢別でも全員1年生に該当する15歳の理解度が一番高い。ただし、理解できていない層も一番多いので、15歳の生徒たちの中には学力的にやや低い層も多かったのであろう。

就業形態別では、就職者(20.6%)よりも無職者(33.5%)の理解度が高い。予習や復

習の時間がとれるかどうかの問題が影響しているのかもしれない。キャリア別でながめると、全日制高校中退者(36.9%)と全日制高校転学経験者(37.5%)と全日制を中退して一度社会に出た者(36.6%)の理解度が特に高いことがわかる。一度は全日制高校に合格するだけの学力があった者にとっては、定時制の授業は概して理解しやすかったと思われる。これに対して第一志望で定時制に来た者(18.5%)や定時制を中退して一度社会に出た者(11.8%)たちの学力は、概してかなり低かったと思われる。

表3-8 授業の理解度 × 属性

|                      | 全体                          | 性別          |          | 学年別  |                    |         |          | 年齢別    |            |        |        |      |       |
|----------------------|-----------------------------|-------------|----------|------|--------------------|---------|----------|--------|------------|--------|--------|------|-------|
|                      |                             | 男子          | 女子       | 1年   | 2年                 | 3年      | 4年       | 15歳    | 16歳        | 17歳    | 18歳    | 19歳  | 20歳以上 |
|                      |                             | 就業形態別       |          |      |                    | キャリア別   |          |        |            |        |        |      |       |
|                      | 就職                          | アルバイト       | 家業       | 無職   | 中卒後すぐに入った者<br>第一志望 | 第一志望でない | 全日制中退    | 全日制転学  | 一度社会に出た経験者 |        |        |      |       |
|                      |                             |             |          |      |                    |         |          |        | 中卒後        | 全日制中退後 | 定時制中退後 |      |       |
| 「十分」+「かなり」理解できている    | 27.2                        | 31.0 > 19.6 | (37.1) > | 25.4 | 26.1               | 25.1    | (39.4) > | 23.9   | 28.1       | 24.3   | 31.6   | 26.9 |       |
| 「あまり」+「ぜんぜん」理解できていない | 22.6                        | 21.1 < 25.1 | 20.2     | 20.3 | (24.8)             | 24.5    | (30.3) > | 17.9   | 20.5       | 27.8   | 26.3   | 21.8 |       |
| 「十分」+「かなり」理解できている    | 20.6 < 24.8 < 26.0 < (33.5) |             |          |      | 18.5               | 27.0    | 36.9     | (37.5) | 28.5       | 36.6   | 11.8   |      |       |
| 「あまり」+「ぜんぜん」理解できていない | (26.8) > 26.4 > 20.0 > 16.2 |             |          |      | 28.4               | 18.5    | 19.7     | 18.8   | 25.0       | 13.4   | (35.2) |      |       |

> は10%未満の差を示す  
> は10%以上の差を示す  
○ は各項目の最大値  
〰 は各項目の最小値

### (3) 学校生活の充実度

最後に、学校生活を全体的にみて充実しているかどうかを問うたのが図3-7である。

「とても」と「かなり」を合わせた充実していると感じている層が28.2%いるのに対して、「あまり」と「ぜんぜん」を合わせた充実していないと感じている層は28.8%いる。両者の割合はほぼ拮抗している。つまり、学校生活の充実度の高い者が3割、まあまあと思っている者が4割、充実度が低い者が3割ということになる。この比率はどのように解釈すべきだろうか。

1994年に東京と埼玉の公立全日制高校の2・3年生を対象としたアンケート調査（『モノグラフ・高校生'95 vol. 43 高校生の性とデート』P. 10参照）で、似たような質問をしているので、それと比較してみよう。「あなたの学校生活は充実していますか」という質問の男女の回答率は以下のようにになっている。

|             | 男子    | 女子    |
|-------------|-------|-------|
| とても充実している   | 10.8% | 14.4% |
| わりと充実している   | 44.6% | 50.7% |
| あまり充実していない  | 30.8% | 28.2% |
| ぜんぜん充実していない | 13.8% | 6.7%  |

尺度が4段階であるので同一とはいえないが、「あまり」と「ぜんぜん」を合わせた充実していないと感じている層は、男子で44.6%、女子で34.9%で、全日制でも充実度の低い生徒は4割近くいることがわかる。

このことから考えると、定時制の充実度の低い層の割合は必ずしも多いとはいえないことがわかる。しかし、この層の意向をできるだけくみ取って、今後ともに定時制高校のきめ細かな教育をさらに充実させることは必要であろう。

表3-9は充実度と属性別（性別）の関係をみたものである。性差はあまり認められない。学年別では、1年生の充実度は高い（32.9%）が、2年生以降は充実していないと感じている層の比率が充実しているとする層を上回ってしまう。多様な生徒が入ってくる比率が多くなることが背景にあるといえようが、定時制教育における2年時以降のカリキュラムなどを含めた対応策も検討すべき課題なのではないだろうか。

キャリア別では、中卒後すぐに入った者（「充実している」が第一志望31.9%と第一志望でない29.2%、以下同じ）と中卒後一度社会に出た者（39.3%）の充実度が高いのに対して、全日制中退・転学経験者（「充実していない」が35.8%と31.3%、以下同じ）や全日制中退後一度社会に出た者（32.0%）や定時制中退後一度社会に出た者（41.2%）の充実度は低いのが特徴である。

全日制にしろ、定時制にしろ、中退・転学経験者という何らかの形で学校とうまく折り合えなかった生徒たちは、第二、第三の学校であった定時制高校にも不満を引きずっていたのであろう。一方で、授業の理解度は低かったが、高校というところにはじめて来た者たちにとっては、少なくともそのような屈折感はなかったのだと思われる。

図 3-7 学校生活の充実度

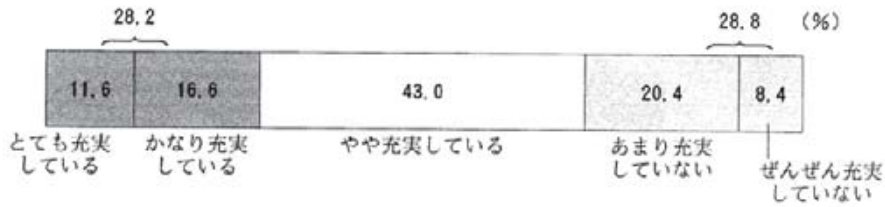


表 3-9 学校生活の充実度 × 属性

(%)

|                     | 全 体  | 性 別         |                             | 学 年 別       |       |            |        | 年 齢 別                       |        |      |      |      |        |
|---------------------|------|-------------|-----------------------------|-------------|-------|------------|--------|-----------------------------|--------|------|------|------|--------|
|                     |      | 男子          | 女子                          | 1年          | 2年    | 3年         | 4年     | 15歳                         | 16歳    | 17歳  | 18歳  | 19歳  | 20歳以上  |
| 「とても」+「かなり」充実している   | 28.2 | 28.2 > 27.7 | (32.9) > 26.2 < 26.7 < 29.5 |             |       |            |        | (33.4) > 32.1 > 28.7 > 21.6 | (33.4) | 20.5 |      |      |        |
| 「あまり」+「ぜんぜん」充実していない | 28.8 | 28.9 > 28.6 | 18.2 < 29.9 < (32.3)        | 30.2        |       |            |        | 21.3                        | 18.7   | 31.5 | 38.8 | 21.0 | (39.8) |
|                     |      | キ ャ リ ア 別   |                             |             |       |            |        |                             |        |      |      |      |        |
|                     |      | 中卒後すぐに入った者  |                             | 全日制高校中退・転学者 |       | 一度社会に出た経験者 |        |                             |        |      |      |      |        |
|                     |      | 第一志望        | 第一志望でない                     | 全日制中退       | 全日制転学 | 中卒後        | 全日制中退後 | 定時制中退後                      |        |      |      |      |        |
| 「とても」+「かなり」充実している   |      | 31.9        | 29.2                        | 24.4        | 18.8  | (39.3)     | 22.6   | 23.5                        |        |      |      |      |        |
| 「あまり」+「ぜんぜん」充実していない |      | 27.0        | 25.3                        | 35.8        | 31.3  | 21.4       | 32.0   | (41.2)                      |        |      |      |      |        |

>は10%未満の差を示す  
 ○は各項目の最大値  
 ~は各項目の最小値